（第３種郵便物認可）　神戸新聞　2012年（平成24

10/1

# 自分らしい言葉選びを

作家、作詞家

## 山下　景子さん

編集委員インタビュー　美しい日本語をいかにして取り戻す？

## 古来の良さ知り柔軟に

快諾を意味する「二つ返事」を「一つ返事」と誤った人が46％に上るなど、日本人の国語力の低下を示す文化庁の世論調査結果が先ごろ話題となった。しかし言葉は生き物。人から強制されたって、正しい言葉遣いは身に付かない。そこで「美人の日本語」（幻冬舎）などの著書で知られる作家、作詞家の山下景子さんに相談してみた。現代人に日本語の良さを見直してもらう手だてはあるのだろうか。

（平松正子）

―デビュー以来、言葉にこだわって執筆されている。

「興味を持ち始めたのは幼いころ。両親とも働いていたので、本好きの祖母に預けられることが多かった。明治の生まれで女が勉強をすると叱られたため、親に隠れて読書したり和歌を詠んだりしたそう。好きなだけ勉強できる時代に生まれたことがどれほど幸せかを教わった。古くからある日本語の魅力を主に女性に向けて発信しているのは、祖母の影響でしょうね」

―最新刊「オトメの和歌」（明治書院）も女性向け。

「古代の日本女性といえば控えめで奥ゆかしいと思われがちですが、今どきの女の子も顔負けの大胆な歌が多い。例えば、大伴坂上郎女の〈恋ひ恋ひて逢へる時だに愛しき言尽くしてよ長くと思はば〉。『恋い焦がれてやっと会えた時ぐらい優しい言葉をいっぱい掛けてよ』という気持ちは昔も今も変わらない。現代の恋人たちにも共感されるのでは」

―恋の歌以外にも？

「平時望妻〈別れにし程を果てとも思ほえず恋しきことの限なければ〉。死に別れてしまったけれど、私が思い続けている限り夫は生きているのだという歌です。歌に詠むことで自分を支えたのでしょう。言葉にはそういう力がある。そして残された歌は、千年後の私たちが大切な人を亡くしたときの救いにもなる」

―男性にも和歌は有用？

「政治家の言葉が軽くなったとよくいわれますが、今に伝わる和歌の作者は、多くが時の為政者たちです。当時の貴族にとって和歌や漢詩の素養は必須。宮廷歌人として仕える官吏もいた。和歌に託して帝に異議を唱えるということもあり、帝もそんな優雅な苦情は聞き入れたそう。言葉遣い次第で交渉ごとも円滑に進むわけですから、もちろん男性にも役立ちます」

―良さは分かるが、歌を詠むところまではなかなか…。

「歌の形にならなくても、気に入った言葉を見つけたらどんどん会話やメールに取り入れてほしい。昔の人だって、嫌な相手から素晴らしい歌を贈られるより、つたなくても恋人にもらった文を喜んだはず。上手か下手かより、大切なのはその人らしさ。長く受け継がれてきた豊かな日本語の中に、きっと自分に似合う言葉があるはず」

―言葉は自ら選んで使うもの。

「そう。着物の場合とよく似ている。手が掛かるのでめったに着ないけれど、部分的に和柄を用いたファッションがある。また最近では、花火大会の日になると街に浴衣姿があふれる。美しく装えば自分も楽しいし、デートならば恋人も喜ぶでしょう。言葉も同じ。日本語の乱れを嘆くよりも、みんなが幸せになれるような言葉選びのコツを提案したい」

―例えば？

「褒め言葉を見直してみるのはどうでしょう。褒めるは『秀む』が語源。良い評価を与えるのでなく、秀でた素晴らしいことを共に喜び合うというのが本来の形に近い。古来、日本人は言霊を信じていたので、良いことはどんどん口に出して伝えようとした。日本人は褒めるのが下手だといわれるけれど、昔の人のように感動したことを素直に言葉にし、共有すればいい」

―現代語が移ろいゆくこと自体は否定しない？

「メールやインターネットが急激に普及した今、言葉も変化することは避けがたい。ただ新しいものを作るにも、元の形や成り立ちを知っていた方が柔軟に対応できるはず。昔に戻るのでなく、しなやかに前へ進む。手弱女という言葉があるように、雪にも風にも折れない竹のようなたわやかさこそ、日本人が持つ本当の強さですから」

「人には見ようとしたものしか見えないし、聞こうとしなければ耳に入ってこない。忙しい現代人は中秋の月くらいしか見ませんが、十六夜、立待月、居待月とそれぞれに名前がある。言葉を知れば心を引かれ、自然にそちらへ目が向く。世界が格段に広がりますよ」

■やました・けいこ

神戸市兵庫区に生まれ現在も在住。作家、作詞家。武庫川女子短期大卒。「美人の日本語」が26万部を超すベストセラーとなったほか、「ほめことば練習帳」「しあわせの言の葉」「イケメン☆平家物語」「現存12天守閣」など著書多数。

本に囲まれて和歌の魅力を語る山下景子さん＝神戸市兵庫区の自宅（撮影・佐々木彰尚）

**ひとこと**

一昨年に結婚したという山下さん。ご主人はもともと彼女が配信するメールマガジンの読者で、誕生日には自作の和歌を贈って愛を育んできたのだとか。美しい日本語は婚活にも役立つようだ。